

第2章 モーディー政権下で進行する民主主義の後退 ——ヒンドゥー至上主義と多数派主義——

湊 一樹

要約：

近年、民主主義にとって不可欠なアカウンタビリティの仕組みの後退が、インドの政治体制において顕著にみられるようになってきている。さらに、ムスリムをはじめとする宗教的少数派に対する差別と抑圧が格段に深刻化しているという理由からも、インドの民主主義の将来を危惧する声はますます大きくなっている。本稿は、インドの民主主義がなぜこれほど急速に後退しているのかを理解するための予備的作業として、主にヒンドゥー至上主義と多数派主義という視点から関連文献を概観する。

キーワード：

ヒンドゥー至上主義 多数派主義 民主主義 宗教的少数派 ムスリム ダリト

はじめに

「世界最大の民主主義」という枕詞が冠されてきたインドの政治体制が、いま根底から大きく揺らいでいる。立法府は審議の空洞化と議会手続きの無視が常態になり、司法府は政府の決定を追認するような判断を繰り返し示し、捜査機関は反対勢力を「合法的」に弾圧するための手段として政府に利用され、選挙委員会や会計検査院などの監視機構は独立性を失ったのではないかと疑いの目を向けられ、テレビ・新聞といった主要メディアはアメとムチによって巧みにコントロールされ、そして、市民社会組織は法規制の厳格化により活動を制約されるようになってきている。民主主義の後退を経て権威主義体制が確立されていく過程で、多くの国がこのような兆候を示したことはよく知られている。

さらに、ムスリムをはじめとする宗教的少数派に対する差別と抑圧が格段に深刻化しているという理由からも、インドの民主主義の将来を危惧する声はますます大きくなっている。2014年5月にナレンドラ・モーディー首相率いるインド人民党（BJP）政権が成立して以降、インドの国是ともいえるべき「政教分離主義」（secularism）の理念はるか後景に退き、それに代わってヒンドゥー至上主義が政治の中心的空間を占めるようになった。同時にそれは、インド政治が「多数派主義」（majoritarianism）の傾向をます

ます強めていく過程でもあり、その当然の帰結として、多数派（人口の約8割を占めるヒンドゥー）による少数派（特に、最大の宗教的少数派であるムスリム）の支配を制度化する試みが着々と進められている。

ただし、ヒンドゥー至上主義勢力によって抑圧されているのは、ムスリムやクリスチャンなどの「よそ者」だけではない。実際、ヒンドゥー至上主義が目指しているのは、強くて偉大なインド国民国家を作り上げ、その支配権を上位カーストのヒンドゥーが握り続けることであり、後進カーストやダリト（旧不可触民）なども抑圧の対象であるという点はよく指摘されている。

本稿は、インドの民主主義がなぜこれほど急速に後退しているのかを理解するための予備的作業として、主にヒンドゥー至上主義と多数派主義という視点から関連文献を概観する。

第1節 急速に後退する民主主義

2014年にモーディー政権が成立して以降、民主主義にとって不可欠なアカウンタビリティの仕組みが、制度としての体裁を保ちながら着々と骨抜きにされている。そのため、インドが民主的規範から大きく逸脱するようになっていくという認識が、多くの専門家の中で幅広く共有されている（Manor 2021; Mukherji 2020; Palshikar 2021）。そして、これに呼応するように、世界各国の政治状況を継続的に分析してきた複数の機関も、最近ではインドに対して一様に厳しい評価を下すようになってきている。

例えば、アメリカの非営利組織であるフリーダムハウスが2020年3月に公表した年次報告書では、冒頭でインドが大きく取り上げられ、モーディー首相率いる与党BJPについて、「多元主義と個人の権利を擁護するという建国当初の約束から距離を取るようになっていく」といった批判的な言葉が並んだ。そして、アメリカとその同盟国（当然、インドと「価値観を共有」する日本も含まれる）が対中国という観点からインドに接近する一方、「中国とインドとの間で価値観に基づく区別が付きにくくなっている恐れがある」とも指摘している（Freedom House 2020, 2）。また、「民主主義の多様性」プロジェクトが同じ時期に公表した年次報告書は、世界的な傾向として権威主義化が進行しているという見方を示すとともに、インドについては、「メディア、市民社会、野党勢力が自由に活動できる領域がモーディー政権下で極端に狭まっており、インドは民主主義のカテゴリーから脱落する寸前にある」と述べている（V-Dem Institute 2020, 6）。

これらの報告書の刊行後、インドでは新型コロナウイルスの感染拡大が続いた。その間にも、感染拡大を好機と捉えているかのような権力者の行動によって、民主的規範があからさまに踏みにじられる状況は深刻さを増している（Mukherji 2020; Varadarajan

2020)。それを裏付けるように、2021年3月に公表されたフリーダムハウスと「民主主義の多様性」プロジェクトの年次報告書では、インドの評価がさらに落ち込みをみせた。前者では、インドのカテゴリーが「自由」(free)から「部分的自由」(partly free)に格下げされ、この結果を受けて、インド政府が報告書の内容について公式に反論する事態となった(Freedom House 2021; Ministry of Information and Broadcasting 2021)¹。また後者でも、インドのカテゴリーが「選挙民主主義」(electoral democracy)から「選挙権威主義」(electoral autocracy)に格下げされたうえに、「破壊された民主主義——インド」と題する特集記事まで掲載された(V-Dem Institute 2021, 20-21)²。

さらに、これらの報告書に先立って2021年2月にイギリスの経済誌『エコノミスト』の調査部門が公表した民主主義指標でも、インドについてまったく同じ傾向がみられる。具体的には、インドが167の国・地域のうち53位と前年からさらに二つ順位を落とし、モーディー政権が成立した2014年の27位を最高に順位(さらには、そのもととなるスコア)の下落に歯止めがかからなくなっている(Economist Intelligence Unit 2021)。

もちろん、「世界最大の民主主義」がかつてどれほど民主的だったのかという点については大いに議論の余地がある。しかし、モーディー政権のもとで、インドがこれまでとは大きく異なる政治体制を伴う社会——現政権の用語法に従うならば、「新しいインド」(New India)——へと生まれ変わろうとしていることは間違いないだろう³。

第2節 宗教的少数派のさらなる周縁化

モーディー政権下で進行する民主主義の後退は、ムスリムをはじめとする宗教的少数派への差別と抑圧が格段に深刻化しているという点にも明確に現れている。実際、これまでも差別と抑圧の対象だったムスリムをさらに周縁化することを意図した法律の制

¹ フリーダムハウスの指標では、旧ジャンムー・カシミール州は「インド側カシミール」(Indian Kashmir)として個別に扱われている。2019年8月にジャンムー・カシミール州の自治権が一方向的に剥奪されたことを受けて、2020年の報告書では、「インド側カシミール」のカテゴリーが「部分的自由」から「不自由」(not free)に引き下げられ、2021年の報告書でも引き続き「不自由」の評価を受けている。

² より正確には、2021年の報告書は、(前年の報告書の対象年である)2019年にさかのぼってインドが選挙権威主義のカテゴリーに入っていたことが確認されたと述べている(V-Dem Institute 2021, 14)。

³ これまでのインドのあり方を全否定するという以上に、「新しいインド」が具体的に何を意味するのかはあまり明確ではない。「新しいインド」を推進する側の主張として、Dasgupta (2019)やMadhav (2019)などがある(前者はBJP所属の元上院議員、後者はRSS出身の元BJP幹事)。「新しいインド」に否定的な論者を「既得権益を握るエリート層」として糾弾するというポピュリズム的な姿勢では、両者は共通している。

定や政策の実施が露骨に進められ、2019年5月にモーディー政権が2期目を開始して以降、そうした動きは一段と顕著になっている。この点に関して、フリーダムハウスは2020年の年次報告書のなかで、ジャンムー・カシミール州の自治権剥奪、アッサム州における国民登録簿の作成、市民権改正法の成立という3点をあげ、ムスリムの基本的人権が着々との侵害されているインドの現状に強い懸念を表明している（Freedom House 2020, 2-4）⁴。最近では、BJPが州政権を握るいくつかの州において、「ラブ・ジハード」（ムスリム男性がヒンドゥー女性を誘惑して結婚し、イスラム教に改宗させようとしているという、ヒンドゥー至上主義者が唱える陰謀論）の脅威に対応するためと称して、改宗を困難にする法律が成立している⁵。

また、新型コロナウイルスの感染拡大が続く2020年8月に、ウッタル・プラデーシュ州アヨーディアでヒンドゥー教寺院（ラーマ寺院）の起工式が大々的に行われ、モーディー首相が民族奉仕団（RSS）の最高指導者モーハン・バーグワトとともに式典に参加したことも、ムスリムのさらなる周縁化という意味で実に象徴的である。ラーマ寺院の建設される場所が、1992年にヒンドゥー至上主義団体の構成員が破壊したモスクの跡地であることを考慮すると、この起工式が単なるセレモニーではないのはいままでのまではない。一国の首相が宗教的行為を行っているとか、政府が特定宗教を後押ししているとかといった問題をはるかに超えて、権力の座に就いたヒンドゥー至上主義勢力の手によって、「新しい共和国」の建国記念式典——それと同時に、「古い共和国」と政教分離主義の告別式——が執り行われたとみるのがむしろ適切であろう（Palshikar 2020）。

なお、最近の報道によると、ヒンドゥー至上主義団体がラーマ寺院建立のための寄付集めと称して戸別訪問を行い、献金した人の家の戸口にラーマ神と建設予定の寺院をあしらったシールを張り付けて回っている。支払いを拒否するとどんな嫌がらせを受けるかわからないため、恐怖心から「自発的献金」に応じる人がいるという話から明らかのように、この寄付集めは恫喝まがいの行為というべきものである⁶。

そして、宗教的少数派にとってさらに脅威なのが、ヒンドゥー至上主義者による直接的暴力の標的になることである。市民権改正法への抗議運動が勢いを増すなか、2020年

⁴ これらの問題については、佐藤（2020）および拓（2021）を参照。

⁵ 陰謀論としての「ラブ・ジハード」については、Strohl（2019）を参照。最近の「改宗禁止法」は、ムスリムのイメージを貶めたり、ムスリム男性に嫌がらせをしたりするための手段というだけでなく、ダリトの集団改宗を阻止するための手段ともなりうる。また、「ラブ・ジハード」という言説の背後には、女性を保護すると称して、ヒンドゥー女性を所有物のようにみなす家父長的価値観があるとも指摘される。ムスリム、ダリト、女性を支配下に置こうとするヒンドゥー至上主義的な価値観が、「改宗禁止法」にはっきりと表れている。

⁶ “Ram temple fundraisers leave behind stickers on doors – sparking fear and concern.” *Scroll.in*, 13 February 2021 を参照。

2月にデリー北部で発生した大規模な暴動では、それが現実のものとなった。この暴動では、53名の犠牲者の大半をムスリムが占め、自宅や商店を襲撃された者の多くもまたムスリムであった。さらに、BJP所属の政治家やヒンドゥー至上主義団体のメンバーが、ヘイトの拡散と暴力の扇動に加担していたことが多数の証拠から明らかになっている。しかし、連邦政府の管轄下にあるデリー警察は、暴動を抑え込まなかったばかりか、ムスリムを標的にした暴動の首謀者を捕まえようとさえしていない⁷。この事件に限らず、政府の意を受けた警察組織の黙認と協力があるために、ヒンドゥー至上主義者は堂々と不法行為を行い、その様子を記録した動画などをSNSで拡散することで宗教的少数派に恐怖心を植え付けるのである。

現在、インドにおいてムスリムが二等市民のような扱いを受ける場面が明らかに増えているのは、上記のような差別的政策が次々と現実のものとなっているからである。さらにその背後には、これまでインド社会で主流を占めることのなかったヒンドゥー至上主義が徐々に影響力を拡大しながら、モーディー政権のもとでメインストリーム化を果たしているという近年の変化がある。それを象徴するように、インドという国のあり方の基底をなしてきた「政教分離主義」が否定的な意味で語られるようになり、さらには、政教分離主義やそれを擁護する者を揶揄する文脈で「sickular」——「sick」と「secular」の合成語——という言葉が広く用いられるようにさえなっている⁸。

このように、宗教アイデンティティに基づいて物事を判断するという意識の高まりと宗教的少数派に対する不寛容がインド社会に充満しているからこそ、差別や迫害から逃れるために、都市部ではムスリム・コミュニティが「ゲットー化」し、ヒンドゥーの偽名を使って生活するムスリムまで現れるようになっているのである（Anderson and Jaffrelot 2018; Thapar 2021）。

第3節 ヒンドゥー至上主義の「包摂性」

⁷ 例えば、“Delhi 2020 | The Real Conspiracy, Episode 1: What the Delhi Police Chose Not to See.” *The Wire*, 28 February 2021; “Delhi 2020 | The Real Conspiracy, Episode 2: The Anti-Muslim Cleric Who Called for Final War.” *The Wire*, 3 March 2021などを参照。

⁸ 最近の例としては、インドの伝統が世界に認知されるうえで、政教分離主義が最大の脅威であるという、ウッタル・プラデーシュ州首相のヨーギー・アディティヤナートの発言がある（“CM: Secularism biggest threat to India’s tradition on global stage.” *Indian Express*, 7 March 2021）。また、ヒンドゥー至上主義者を含む政権支持者が好んで使うスラングは「sickular」の他にも多数あり、「Urban Naxal」「Tukde Tukde Gang」など新しいものが（恐らく、政府与党によって組織的に）次々と生み出されている（“A dictionary on social media trolls (and the words they use).” *The Quint*, 10 July 2017）。

ヒンドゥー至上主義による抑圧の対象は、ムスリムなどの宗教的少数派だけでなく、後進カーストやダリトにまで及んでいる。ただし、後進カーストやダリトとヒンドゥー至上主義との関係は、ムスリムとのそれよりはやや込み入っている。なぜなら、ヒンドゥー至上主義はムスリムを攻撃と排除の対象としてきたのとは対照的に、後進カーストやダリトに対しては、「調和」や「結束」といった言葉を用いながら、包摂の対象とするかのような姿勢を取っているからである⁹。また、選挙での投票行動に関する限り、BJPは後進的な社会集団の間での支持を大きく拡大する傾向にあり、より包摂的な政党へと変貌を遂げているようにもみえる (Jeffrelot 2019; Suri 2019)。

その一方で、ヒンドゥー至上主義が真に目指しているのは、上位カーストによるインド社会の支配を維持・強化することであり、その目的を達するためには、後進カーストやダリトがあげる声を押さえつけるだけでなく、ムスリムを攻撃するための駒(例えば、コミューナル暴動でムスリムを襲撃する暴徒)として利用さえしているという見方が、研究者や社会活動家などの間に根強くある (Drèze 2020; Jeffrelot 2021; Teltumbde 2020)¹⁰。

この点に関して、バンワル・メグワンシの回想録 (Meghwanshi 2020) は非常に示唆に富んでいる¹¹。ラージャスターン州のダリト・コミュニティ出身のメグワンシは、RSSの地方組織に所属していた経歴があり、自らの体験に裏打ちされた主張には説得力がある。また、RSSの幹部ポストの上位カーストによる独占、ヒンドゥー至上主義に都合のよいアンベードカル解釈、既存政党から無視されているカースト集団を政治動員するための伝承の捏造、BJP候補としての公認を餌にした反対勢力の切り崩し工作など、ヒンドゥー至上主義に関する既存研究が明らかにしてきた点も数多く指摘されている。

回想録の概要は、以下のようなものである。小学校の教師 (RSSメンバー) に誘われたことがきっかけで、10代前半からRSSの活動に参加していたメグワンシは、熱心な取り組みが認められ、地方組織のなかで順調に昇進を重ねていく。しかし、ある決定的な出来事が引き金となり、メグワンシのRSSへの怒りと不信は頂点に達し、組織を去るという決断を下すことになる。復讐に燃えるメグワンシは、ジャーナリストや

⁹ 実際には、「ヒンドウトゥヴァ」(Hindutva)を掲げるヒンドゥー至上主義のなかでも、サーヴァルカルとRSSが思想的に必ずしも一致しているわけではないことに注意が必要である。例えば、「ヒンドゥー」とは誰なのかという点などがそうである。

¹⁰ 日本における女性差別というまったく異なる文脈ではあるが、「権力を握る少数派男性」が「権力から疎外された多数派男性」(つまり、「わきまえてきた男性」)を「女性」にけしかけるといふ、星野(2021)が指摘する構図は、それぞれを「上位カースト」「後進カースト・ダリト・指定部族」「ムスリム」に入れ替えると、これらの研究がヒンドゥー至上主義の理想とする社会と指摘する構図と酷似している。

¹¹ ヒンディー語による原著は2019年に出版されている。メグワンシに対するインタビュー記事である、Chandra(2020)もあわせて参照。RSSの元メンバーによる著作にはGoyal(2000)もあるが、こちらは著者自身の経験についての記述を中心とした回想録ではない。

政治活動家としてヒンドゥー至上主義の実態を社会に訴える取り組みを熱心に行うが、活動の重心はダリトの権利擁護のための社会運動へと徐々に移っていき、志を同じくする社会活動家や人権団体とも協力関係を築いていく。その一方で、メーグワンシは様々な活動を通して RSS とその関連団体と激しい衝突を繰り返し、組織の内と外の両方から RSS の偽善性と独善性を目にするようになる。

メーグワンシが RSS と決別することになったのは、地方組織の幹部が参加する集会のために自ら食事を用意したにもかかわらず、それが食べられずに道端に捨てられた（つまり、ダリトの作った食事だったために手を付けられなかった）という経験をしたためである。このような非道な行いは当然罰せられると信じていたメーグワンシは、この出来事を周囲のメンバーや RSS 幹部に直接訴え、さらには RSS の最高指導者に直接手紙まで書いたが、彼の告発は組織内で完全に黙殺されてしまうのである（第 19～22 章）。実は、メーグワンシはそれ以前にも、ヒンドゥー社会の一体性を強調する RSS の公式見解とは裏腹に、ダリトという自らの属性によって組織内で差別的な扱いを受けるという経験をしている。例えば、ある RSS 幹部（プラチャーラク）に将来的には自分もプラチャーラクになりたいという希望を伝えると、ダリトであることを理由に諦めるよう諭されたことがあったと述べている（第 14 章）。

ちなみに、ほぼ同じ時期に、アンダーセンとダームレーの 2 冊目の共著（Andersen and Damle 2018）が刊行されているが、多数の注と参考文献が付された学術書のような体裁から、「幅広い利害を取り入れながら、インド社会の変化に対応しながら成長した RSS」というイメージを強調する内容にいたるまで、メーグワンシの回想録とは好対照をなしている。さらに、この 2 冊の著書に対する筆者の評価も対照的である。なぜなら、アンダーセンとダームレーの共著は、RSS を穏健で中道的な存在として印象付けることで、ヒンドゥー至上主義のメインストリーム化を後押ししようとする政治的意図を感じるからである¹²。

第 4 節 ヒンドゥー至上主義の長期プロジェクト

ヒンドゥー至上主義のメインストリーム化は、モーディー政権のもとで加速度的に進行したのは確かであるが、それ以前から一貫して続く長期的傾向でもあったという点を見逃すべきではない。例えば、ヒンドゥー至上主義について長年研究してきたクリスト

¹² アンダーセンの主張に対する批判として、佐藤（2019）を参照。ちなみに、ダームレーが RSS のメンバーであり、Andersen and Damle (2018) はモーディー首相の提案を受けて執筆されたと本人が語っていることを考えると、この本が RSS によって公認された本であることは明らかだろう（Jha 2018a, 2018b）。

フ・ジャフルロは、2004年にBJPが総選挙で敗れて政権を失った前後に、ヒンドゥー至上主義の時代は終わったという見方をする専門家が自分の周りにたくさんいたが、RSSやその関連団体は長期的な視点に立って、草の根の活動を通して影響力を増していることをよくわかっていたので、ヒンドゥー至上主義の動向に研究関心を持ち続けていると述べている (Anderson and Jaffrelot 2018, 470)。

また、政治学者のスーハス・パルシーカルは、BJPが下野した2004年総選挙の際に行われたサンプル調査の結果をもとに、インド社会が「多数派主義」(majoritarianism)的傾向を強め、ヒンドゥー至上主義が多く国民に受け入れられやすくなっているという大きな変化をすでにこの時点で指摘していた (Palshikar 2004)。民主主義の名のもとに、多数派(人口の約8割を占めるヒンドゥー)による少数派(特に、最大の宗教的少数派であるムスリム)の支配が正当化されるようになってきている現状を考えると、パルシーカルの指摘は見事に本質を突いていたというほかない。そして、このような長期的な視野に立つと、「モーディー体制」を特徴づける概念としては、ポピュリズムよりも多数派主義の方がむしろ重要であるという、パルシーカルの主張には大いに説得力がある (Palshikar 2021)。

このように、ヒンドゥー至上主義のメインストリーム化が目に見える形で現れたのは、RSSとその関連団体が「地道な取り組み」を長年にもわたって続けてきた結果、ヒンドゥー至上主義の勢力拡大という長期プロジェクトが実を結ぼうとしているためであるといえるだろう。また、連続性という点では、「ラブ・ジハード」や「ムスリムの人口爆発」などの陰謀論をヒンドゥー至上主義が唱え続けてきたという点も重要である。つまり、プロパガンダの手法が多様で洗練されたものになり、社会のより幅広い層にヒンドゥー至上主義が受け入れられるようになった可能性は大いにあるが (Singh 2019)、メーグワンシを含む多数の論者が指摘するように、ありもしない「危機」を捏造することで人々の不安を煽るといったやり方は本質的に何も変わっていないのである。

例えば、グジャラート州で反ムスリム暴動が起きてから半年後の2002年9月にモーディー州首相(当時)が、ムスリムへの偏見に満ちた演説をしたことはよく知られている。具体的には、暴動で被害を受けた避難民のためのキャンプを「子作りセンター」と呼んだり、(インドの家族計画の標語である「われわれ(夫婦)2人、われわれの(子ども)は2人」をもじって)「われわれ5人、われわれのは25人」と述べて、4人まで妻を持つことができるというコーランの教えを揶揄したりする発言を公衆の面前で行った。いうまでもなく、いずれも「ムスリムの人口爆発」を想起させるヘイト・スピーチ以外の何物でもない¹³。

¹³ “Should we run relief camps? Open child producing centres?” *Outlook*, 30 September 2002 を参照。グジャラート州での反ムスリム暴動については、ヒンドゥー至上主義団体の関与と州政府機関の共謀関係が指摘されている。例えば、Khentan (2021)を参照。

それから17年後の2019年、モーディー首相は独立記念日の演説のなかでインドの人口爆発に懸念を示し、「家族を小さな規模に保つことは愛国心の一つの形である」と述べている。「子どもがたくさんいる家族は愛国的ではない」（だから、「ムスリムは非国民である」ともとれる、この発言の本当のメッセージは何であるのかはいうまでもないだろう。実際、人口抑制のための法律を作るべきであるという意見は、ヒンドゥー至上主義勢力の間に根強く存在する¹⁴。

おわりに

アンダーセンとダームレーは、1987年にRSSに関する最初の共著を出版し、結論部分にあたる最終章の冒頭で、「文化的な革命がまず起きなければ、インドが力強く自立した国になることはない」とRSSの創設者たちは考えていた」と述べている（Andersen and Damle 1987）。それから30年以上が経過した現在、RSSとその関連団体が「地道な取り組み」を長年にもわたって続けてきた結果、ヒンドゥー至上主義が政治の中心的空間を占めるようになってきているという現状を考えると、「文化的な革命」は現実のものになりつつあるとあってよいだろう。

このような大きな変化がインドにもたらされた要因については、他にもいくつかの点を指摘することができる。まず、政治的プロパガンダの手法を駆使してモーディー首相のイメージを作り上げ、「(盲目的な)信頼」を国民から勝ち取ることにBJPが成功したという点である（湊 2019; Sen 2021; Sircar 2020）¹⁵。モーディー首相に対する「信頼」とそれに基づく個人的人気をテコにして、BJPが二期続けて中央政権を担うことが可能となり、それがヒンドゥー至上主義の台頭を加速させた。また、経済自由化によってインド経済が急成長を遂げる一方、格差の拡大、雇用不足、農村部の疲弊といった問題が解消されるどころか、ますます深刻化していることへの人々の不満が、BJPのポピュリズム的レトリック（例えば、『よそ者』のムスリムばかりが優遇されている」といった排他的な主張）に説得力を与えたという、より構造的な要因もあげられるだろう。

現在、選挙において圧倒的な支持を集め、統治の面では絶対的な権力を握るモーディー首相のもとで、「文化的な革命」は現実味を増してきているが、その一方で、RSSの

¹⁴ 2019年8月15日の首相府（PMO）のツイートとツイートに付けられているコメントを参照（<https://twitter.com/PMOIndia/status/1161831457003753472>）。

¹⁵ モーディー政権の政策への評価が高いことが、首相に対する支持につながっているのではなく、首相に対する「(盲目的な)信頼」があるからこそ、多くの有権者が（実際に便益を受けているかとは無関係に）モーディー政権の政策を評価するという、Sircar (2020)の指摘は重要である。この点は、政策の効果を主観的な評価によってのみ測ることがいかに危険であるか示唆している。

創設者たちが望んだように「インドが力強く自立した国」への歩みを進めているのかといえば、それはかなり疑わしい。なぜなら、モーディー政権が新型コロナ対策として断行した全土封鎖は、都市から農村へ帰還する出稼ぎ労働者を大量に生み出し、感染拡大の収束に結びつかなかったばかりか、インド経済に深刻な打撃をもたらし、それ以前から続く経済の低迷にさらなる拍車をかけたからである。

そして、経済の危機的状況が深まるなかで、政府の無為無策を批判する声を押さえつけようと権威主義化が一段と進み、社会に充満する人々の不満を逸らすためにムスリムなどの宗教的少数派がさらなる差別と抑圧の標的にならないとも限らないという意味でも、インドの置かれている状況はきわめて深刻である。

参考文献

- 佐藤宏 2019. 「モーディー政権下における政党政治——「一党優位」の復活か連合政治の新段階か」堀本武功・三輪博樹編『モディ政権とこれからのインド』調査研究報告書 アジア経済研究所.
- _____ 2020. 「インドにおける移民排除法制の展開—インド北東地域を中心に」アジ研テクニカルレポート.
- 拓徹 2021. 「2019年のカシミール問題」田所昌幸編『素顔の現代インド』慶応大学出版会.
- 星野智幸 2021. 「わきまえてきた男性へ」朝日新聞、2021年2月27日.
- 湊一樹 2019. 「ワンマンショーとしてのモーディー政治——インド総選挙での与党の圧勝と政治プロパガンダ」『IDE スクエア』、2019年8月.
- Andersen, Walter and Shridhar D. Damle 1987. *The Brotherhood in Saffron: The Rashtriya Swayamsevak Sangh and Hindu Revivalism*. Boulder: Westview Press.
- _____ 2018. *The RSS: A View to the Inside*. Gurgaon: Penguin.
- Anderson, Edward and Christophe Jaffrelot 2018. “Hindu Nationalism and the ‘Saffronisation of the Public Sphere’: An Interview with Christophe Jaffrelot.” *Contemporary South Asia*, 26 (4), 468-482.
- Chandra, Abhimanyu 2020. “Dalits Will Quit RSS if Exposed to Real Ambedkar: Bhanwar Meghwanshi, Former Karsevak.” *The Caravan*, 6 September.
- Economist Intelligence Unit 2021. *Democracy Index 2020: In Sickness and in Health?*
https://www.eiu.com/public/topical_report.aspx?campaignid=democracy2020
- Dasgupta, Swapan 2019. “India Under Modi: The Establishment Overreacts.” *Journal of Democracy*, 30 (1), 91-98.

- Drèze, Jean 2020. "The Revolt of the Upper Castes." *India Forum*, 20 February.
- Freedom House 2020. *Freedom in the World 2020: A Leaderless Struggle for Democracy*, Washington, DC: Freedom House.
https://freedomhouse.org/sites/default/files/2020-02/FIW_2020_REPORT_BOOKLET_Final.pdf
- _____ 2021. *Freedom in the World 2021: Democracy under Siege*, Washington, DC: Freedom House.
https://freedomhouse.org/sites/default/files/2021-02/FIW2021_World_02252021_FINAL-web-upload.pdf
- Goyal, D. R. 2000. *Rashtriya Swayamsewak Sangh* (Second Revised Edition), New Delhi: Radhakrishna Prakashan.
- Jeffrelot, Christophe 2019. "Class and Caste in the 2019 Indian Election: Why Do So Many Poor Have Started to Vote for Modi?" *Studies in Indian Politics*, 7 (2), 149-160.
- _____ 2021. "Rise of Hindutva Has Enabled a Counter-revolution against Mandal's Gain." *Indian Express*, 10 February.
- Jha, Dharendra K. 2018a. "Instead of Offering Objective Analysis, Andersen-Damle Book Helps RSS Perpetuate Convenient Myths." *Scroll.in*, 20 August.
- _____ 2018b. "Shridhar Damle: Modi Gave Idea for RSS Book; Promotions Deliberately Focused on White-skinned Andersen." *The Caravan*, 7 September.
- Khetan, Ashish 2021. *Undercover: My Journey into the Darkness of Hindutva*, Chennai: Context.
- Madhav, Ram 2019. "This Election Result is a Positive Mandate in Favour of Narendra Modi." *Indian Express*, 24 May.
- Manor, James 2021. "A New, Fundamentally Different Political Order: The Emergence and Future Prospects of 'Competitive Authoritarianism' in India." *Economic and Political Weekly* (online), 2 March.
- Meghwanshi, Bhanwar 2020. *I Could Not Be Hindu: The Story of a Dalit in the RSS*, New Delhi: navayana.
- Ministry of Information and Broadcasting 2021. "Rebuttal to Freedom House Report on India's Declining Status as a Free Country." 5 March.
<https://www.pib.gov.in/PressReleaseDetail.aspx?PRID=1702697>
- Mukherji, Rahul 2020. "Covid vs. Democracy: India's Illiberal Remedy." *Journal of Democracy*, 31 (4), 91-105.
- Palshikar, Suhas 2004. "Majoritarianism Middle Ground?" *Economic and Political Weekly*, 39 (51), 5426-5430.
- _____ 2020. "At Ayodhya, We Will See Dismantling of the Old, and the Bhoomi Pujan of the

- New Republic.” *Indian Express*, 4 August.
- _____. 2021. “Understanding the Nature of Party Competition and Politics of Majoritarianism.” *Economic and Political Weekly* (online), 2 March.
- Sen, Ronojoy 2021. “Charisma Through Communication: Comparing Modi’s Media Strategy to Nehru and Indira.” *Economic and Political Weekly* (online), 2 March.
- Singh, Shivam Shankar 2019. *How to Win an Indian Election: What Political Parties Don’t Want You to Know*, Gurgaon: Penguin.
- Sircar, Neelanjan 2020. “The Politics of Vishwas: Political Mobilization in the 2019 National Election.” *Contemporary South Asia*, 28 (2), 178-194.
- Strohl, David James 2019. “Love Jihad in India’s Moral Imaginaries: Religion, Kinship, and Citizenship in Late Liberalism.” *Contemporary South Asia*, 27 (1), 27-39.
- Suri, K. C. 2019. “Social Change and the Changing Indian Voter: Consolidation of the BJP in India’s 2019 Lok Sabha Election.” *Studies in Indian Politics*, 7 (2), 234-246.
- Teltumbde, Anand ed. 2020. *Hindutva and Dalits: Perspectives for Understanding Communal Praxis* (Revised Edition), New Delhi: Sage.
- Thapar, Karan 2021. “What Does It Mean to Be Muslim in India? Ghazala Wahab in Conversation with Karan Thapar.” *The Wire*, 26 February.
- Varadarajan, Siddharth 2020. “As the First Year of Modi 2.0 Ends, It’s Clear that Democracy Has Been Quarantined.” *The Wire*, 30 May.
- V-Dem Institute 2020. *V-Dem Annual Democracy Report 2020: Autocratization Surges—Resistance Grows*, Gothenburg: V-Dem Institute.
https://www.v-dem.net/media/filer_public/de/39/de39af54-0bc5-4421-89ae-fb20dcc53dba/democracy_report.pdf
- _____. 2021. *V-Dem Annual Democracy Report 2021: Autocratization Turns Viral*, Gothenburg: V-Dem Institute.
<https://www.v-dem.net/files/25/DR%202021.pdf>